

〔共同研究：インドネシアとの文化的交流を深めるための総合的研究〕

## スンバで家を建てること

——インドネシアとの文化的交流を深めるためのプロジェクト報告（2）——

小 池 誠

### はじめに

2010年に発表した報告に続いて、この論文では2007年度から筆者が中心になって進めてきたインドネシア・スンバ島の慣習家屋再建プロジェクトの概要を取り上げる。前回の報告〔小池 2010〕は、建築の舞台となる中核村ウンガの概要と、2008年3月の「マカテンバの家」(Uma Makatempa)の建築を取り上げたので、本稿では同年10月に行われた「大きな家」(Uma Bakulu)の建築の全容を時系列に沿って明らかにしたい。また、中核村ウンガにおける今回の「大きな家」の建築について、社会・経済的側面と儀礼的側面から、その意味を検討してみたい。本稿の最後にまとめとして、このような地域社会への援助に関わる問題点も含めて、慣習家屋再建プロジェクト全体の総括を試みる。

### 1 「大きな家」の建築

#### 1-1 準備段階

10月18日、映像制作会社エスパのスタッフ、井ノ本氏と岡部氏とともにスンバに入った。このプロジェクトは、ウンガ村における慣習家屋の再建を援助するという形で、スンバの地域文化振興を主目的としているが、その他に桃山学院大学と国立民族学博物館、竹中大工道具館の3機関の共同でスンバにおける慣習家屋建築のプロセスを映像化するという目的ももっている<sup>1)</sup>。そのため建築人類学の専門家である佐藤浩司氏（国立民族学博物館）がすでにスンバに入っていた。エスパのスタッフ2名は国立民族学博物館の依頼を受けて撮影に当たることになっている。また、竹中大工道具館の西山マルセーロ氏も10月23日にスンバに到着し、建築過程の調査に従事した。

前回の報告で述べたように、プロジェクトの当初の目的であった「ラトゥの家」(Uma Ratu)の建設は2008年中は断念し、もともと村にあった予定に従い、「大きな家」と「カリ

1) このプロジェクトの報告は、建築に焦点を当てて、小池・佐藤・西山〔2011〕の連名ですでに『竹中大工道具館研究紀要』に発表している。スンバの家屋のインドネシアの建築史上の位置づけと、スンバの建設資材と工具、建設の技術については、上記の報告を参照。

キーワード：インドネシア、スンバ島、慣習家屋、民族建築、援助

トゥ・アフの家」(Uma Kalitu Ahu), 「ルアの家」(Uma Rua), 「ボーフの家」(Uma Bohu)の改修を10月に進めることになっていた。そのなかでとくに「大きな家」の建築を日本側から援助し、その過程を撮影することが決まっていた。調査チームが到着した時には、「ボーフの家」の改修工事はすでに始まっていた。また、「トゥラ・パライングの家」の縁側部分(*bangga*)を据え付ける工事も始められていた。縁側は普通の慣習家屋には正面部にしかないが、この家屋では左側にあり、この家の主であったラジャ(慣習首長)を中心とする話し合いの場として使用されていた。その後取り外されたが、今回、新たに設置し、話し合いの場にしようという計画であった。

「大きな家」の建築に使われる木材は、筆者の到着時点ですでに伐木と木曳きが完了していた。10月15日に多くの村人が参加し、木曳き歌が賑やかに歌われるなか、主柱に使われる木材は村の中に曳かれた。この木曳きの模様は先にスンバに到着していた佐藤氏が撮影した。ロクカタブ(Lokukatabu)という集落から中核村ウンガまで男女合わせて183人が木材を曳いた。木曳きはただ曳くだけの単純な作業なので、男性だけでなく女性も参加して行われるのが普通である。全参加者中、「大きな家」をもつトゥラ・パライン氏族の成員は48人(全体の26.2%)だけで、ウンガの他の氏族の成員が数多く参加していた。木曳きという作業はもともと多くの曳き手を必要とするので、中核村ウンガ全体の共同作業という特徴が強く表れている。

主柱に対する木材の加工などの準備が整い、10月23日に「大きな家」が解体されることになった。その前の晩に、屋根裏にある「マラブを降ろし」(*purungu marapu*)、解体作業が順調に進むように祈願するためのマラブを降ろす儀礼が執行された<sup>2)</sup>。その後、屋根裏に保管されていたマラブ(*marapu*)が隣の「河口の家」に移された。「大きな家」とこの家はともにトゥラ・パライング氏族に属しているからである。マラブ(祖先、祖霊)とは、この文脈ではマラブが宿ると信じられているマムリ(*mamuli*, 金属の装飾品)とカワダク(*kawadaku*, 金属片)のことを指す。ただし、これらはマラブの依代として信仰の対象になっているのであり、マラブはふだん屋根裏に存在するというよりも、天界にいると考えられる。「大きな家」の屋根裏には2個のマムリ(金製と銀製)と9枚のカワダク(内1枚は金)が保管されていた。

10月23日の早朝に、家屋の解体が始まった。完了した後、「大きな家」のマラブが移された「河口の家」で儀礼を執行し、豚1頭と鶏2羽を供犠した。この儀礼の目的は明朝から始まる「大きな家」の建築が災いなく、順調に進むことを祈願することである。そのため、とくにハリング(*haringu*)という浄化儀礼の役割を担っている。ハリングとは、祈願者の前に置かれていた「冷たい水、肥沃な水」(*wai maringu, wai malala*)を振りまいて、「冷たくする」(安全な状態にする)ための儀礼である。供犠された豚肉とご飯は、後で主柱となる

2) 建築儀礼の詳細については拙稿「第6章 ウンガの建築儀礼」[小池・佐藤・西山 2011: 58-65]を参照。

木材の上に置かれた。明朝に予定されている柱立てに備えて、擬人化された木材に食料を供えているのである。儀礼の後、4組の男女が太鼓とドラのリズムに合わせて踊り (*renja*)、祝祭的雰囲気が高まった。

### 1-2 建築の過程

10月24日の未明から「大きな家」の4本の主柱を立てる作業が始まった。その前に、水と生米、シリー・ピナン（ビンロウジュとキンマの実）を主柱のための穴に入れた。これは主柱に対する供物と考えられる。主柱は前列右側の占いの柱 (*kambaraingu uratu*) から立て始めて、上から見て反時計周りの順番で他の3本の主柱を立てていく（前日、解体する時も元の主柱をこの順番で抜いた）。この方向性はスンバでは「右回り *palo wanangu*」とみなされ、豊穡をもたらす向きと考えられている。身体に布を巻くのもこの向きである<sup>3)</sup>。その後、建築作業の途中で、占いの柱の根元に祈願者が座って儀礼を実施した。祈願者一人で祈願の文句を唱えた。「大きな家」を建てることになった経緯を語り、柱を立て、「人びとはもう働いている、（柱の上に）降りる時、登る時、人々を守ってくれ *ni nyuna na mateku, jia ka na maràma, kapiaku ana rangu bau mangga-nya ba na-puru, jiaka ba na-hai*」と作業の安全を祈願する文句が含まれている。祈願の後、1羽の鶏と1頭の豚を供犠した。

4本の主柱を立てた後、その上に2本の梁 (*patenga doku*) を渡し、さらに屋根頂部の骨



写真1 「大きな家」の屋根頂部の組み立て

3) 死者に対しては、これと反対に布が「左回り *palo laingu*」に巻かれる。「右回り」が生を表し、「左回り」が死を表している。



写真2 「大きな家」の屋根葺き

組みを作っていく。ウンガの家屋建築の特徴の一つは、木材と木材を固定する際、一切、釘や金物を使用しないで、ツタ植物だけを用いることである。下屋部分を支える柱を主柱の周囲に立て、下屋を組んだ。この日は全部で117人の男性が働き手として記録されている。この全員が実際に作業に従事したわけではなく、実際に働いた人から、ただ遠巻きに見ているだけの村人もこの数字には含まれている。「大きな家」を建てる側（トゥラ・パライン氏族）からすれば、実質的な働き手の数を記録するというよりも、何人分の食事を用意しないといけないかという意味合いが大きい。117人の中で実際に建築中の骨組みの上によって作業をしたのはわずか8人ほどである。この日の作業だけで「大きな家」の柱組みが完成し、一部の屋根にチガヤを葺く作業も始まった。このようにして動員された多くの働き手が、もちろん勝手気ままに建築作業に従事しているわけではない。ウンガには賃金をもらって働く専門職としての大工は存在しない。マラブの家の建築に関わったすべての村人はその技能には違いがあっても一般の農民である。しかし、働き手が勝手に仕事するわけではなく、現場で差配を務める人間が必ず存在する。今回の建築作業では、ハリ・コンドゥ氏族の「カリトゥ・アフの家」に属する長老が、「大きな家」の実質的な家長であるH氏<sup>4)</sup>（仮名）に呼ばれて現場監督の役割を果たした。とくに雨が屋内に入らないようにするため、かれは下屋を組む時、軒先の高さを調整することに細心の注意を払った [小池・佐藤・西山 2011: 44]。

25日も屋根葺きが続けられた。屋根葺きでは、働き手がそれぞれの年齢・技能に応じて個々

4) 拙稿 [小池 2010: 208] 参照。

の役割を果たすというウンガの建築仕事の特徴がよく表れている。地面では高齢の村人が座っておしゃべりをしながらチガヤを組んで一種のパネル状のものを作っている一方、比較的年齢の若い働き手が屋根の上に登って、そのパネルを使って、軒先から順に屋根を葺いていく。

多くの村人が参加して、賑やかに作業が行われたのは24日だけだった。とくに26日以降は、トゥラ・バライン氏族の成員が中心になって25人程度で内装作業を進めた。この工程では、H氏自身が陣頭指揮を取って壁作りや床作りを進めた。ここで注目すべきは内装の段階における炉の組み立てである。もとの家にあった炉の灰が保管されていて、炉が組み立てられてから、その灰が新しい炉に使われた。灰の下にはマムリを一つ置いていた。これは、「炉の心臓、炉の肝臓 *puhu awu, na atu awu*」と呼ばれ、炉を守る役割をされると考えられている。

### 1-3 マラブを戻す儀礼

「大きな家」は、隣の「河口の家」に預けてあったマラブを元に戻すことによって、名実ともにマラブの家になる。たとえ家屋が完成し人が住んでいても、マラブのない家屋は不完全な状態である。

11月6日に、一部だけ開けておいた屋根を閉じて、「大きな家」の建築工事は完了した。夜になって、マラブを「大きな家」の屋根裏に戻すための儀礼が行われた<sup>5)</sup>。この儀礼は、たんにマラブを戻すという目的をもっているのではなく、毎年、農作業を始める前の時期に行われる農耕儀礼も兼ねて執行された（このことが後で問題になった）。種々の事情でウンガのなかで「大きな家」が最初に儀礼を執行することとなった。ウンガでは最初に「カリトゥ・アフの家」が農耕儀礼を執行するのが慣習 (*horu*) なので、その許しを得る儀礼の手続きが必要になる。

完成したばかりの「大きな家」の「大きなカハル」(*kahalu bākulu*, 家屋の右側の部分)に村人が集まり、マラブを戻す儀礼に先立って交換儀礼を実施した。「大きな家」が許しを請うためのマムリとロル・アマフ (*lolu amahu*) を「カリトゥ・アフの家」に贈与した。それと交換に「カリトゥ・アフの家」は「大きな家」に1枚の布を贈与した。スンバではこのような交換儀礼を行うことで二つの集団間の協力的な関係を確認する。「大きな家」は実際に「カリトゥ・アフの家」の妻の受け手であるので、「大きな家」がマムリとロル・アマフという男財<sup>6)</sup>を贈るのは、実際の婚姻関係に適合する交換である。

「河口の家」にあったマラブが「大きな家」に戻された。家屋の前面部の中央に位置する「上のコルン」(*korungu ladu deta*)<sup>7)</sup>の前に集まった長老がその中味を点検した後、ヤシ油で

5) この時点ですでに筆者は帰国していた。エスバのスタッフが撮影した映像資料と、後日実施した聞き取りの資料に基づいて、この部分を書いている。

6) 婚姻に際して妻の受け手(夫側)が与え手(妻側)に贈る男財は、馬と水牛という家畜と、マムリとロル・アマフという金属の装飾品であり、そのお返しに妻の与え手は豚と布から成る女財を贈ることになっている。

きれいに磨いた。その後、「上のコルン」で祈願者一人が小声で祈願の文句を唱え<sup>8)</sup>、鶏と豚を供犠した。続いて、「大きなカハル」で祈願者一人によって儀礼が行われた。この祈願の内容は、これまでの儀礼と同様の文句が繰り返され、「大きな家」を再建することになった経緯が唱えられた。また、「カリトゥ・アフの家」よりも先に家屋を建て、儀礼を実施することが交換儀礼で認められたことが言及された。その後、「全てが不足していて、もうすぐ種を蒔く。様々な作物が順調に育つように *wanggu baku pekaya na tana mapa dimu karingu dalu wengu, purungu pawuaru, purungu pababa mata kahama cumbu paku kambaunu, kahama cumbu riputu kapuda, cumbu odaho janggu.*」という文句があり、これから始まる農作業の成功を祈願した。

儀礼で供犠された豚の肝臓に良くない兆候が認められた。3日以内に人が死ぬという。供犠獣の占い結果が良くない時には、プイ・モワル (*pui mowalu*) という手と腕を用いる占いによって凶兆の理由を探るのが望ましい。この時はそれができる儀礼的職能者がいなかったため、プイ・モワルなしに、その場の長老たちは完成した「大きな家」のための儀礼と農耕儀礼を兼ねて執行したことが過ちだとみなし、ヒヨコを犠牲にする儀礼を行って、マラブの許しを願った。

この夜に供犠された家畜の肉とご飯を儀礼の参加者が食べた後、籠に入ったママリを屋根裏の一面にあるマラブの棚 (*hendu marapu*) に納めた。これによって「大きな家」は真の意味でマラブの家になったのである。

## 2 中核村ウンガにおける家屋建築

### 2-1 社会・経済的意味

「大きな家」は中核村ウンガに建つマラブの家の一つである。マラブの家は、一般の日本の家屋とは違い、単なる家族の生活の場ではなく、氏族 (*kabihu*) 全体またはその一部をなす親族集団の始祖 (マラブ) を祀るための儀礼の場として重要である。「大きな家」は、この家屋自体を指すと同時に、この家屋と、ここで執行される儀礼に責任をもつ人々の集団、つまりトゥラ・パライング氏族の一部を指している。実際に「大きな家」に住む人は限られているが、「大きな家」という集団に帰属する成員の数は、それよりもはるかに多い。ただし、今回の「大きな家」は、その成員だけの責任だけでなく、中核村ウンガという一つの共同体全体が関わっていたのである。先ずは、その点を考える必要がある。

「大きな家」の建築は、前回の報告 [小池 2010] でその経緯を述べたように、「ラトゥの家」の建築の代替として進められたものである。慣習家屋再建プロジェクトは特定の親族集団に対するものではなく、ウンガ全体を対象にしているため、「大きな家」の建築におい

7) これは死者の霊 (*mamatu*) のための特別な部屋であり、「聖なる部屋」とも呼ばれる。死者の霊は、家の始祖などを含むマラブとは明確に区別された存在であり、その名前が記憶されている比較的到最后死んだ人間の霊を指す。

8) 「上のコルン」における祈願はつぶやき (*kanguru*) 程度でやるのが慣習である。

でも、ウンガの主だった長老が集まり、何度も話し合いがもたれた。また、「大きな家」をもつトゥラ・パライングは貴族層の氏族であるので、その活動を平民の氏族が支えるのは、ウンガの慣習上当たり前のこととみなされた。もちろん他の慣習家屋の建築においても、その家屋をもつ氏族の成員だけが作業に携わるのではなく、他の氏族の協力を受けて共同作業になるが、このような背景があって、とくに「大きな家」の建築はウンガ全体の共同作業という性格を強くもっていた。

つぎに「大きな家」の建築に必要な経費について考えてみたい。マラブの家の建築経費という概念は1980年代のウンガにおいて存在しなかった。柱のための木材だけでなく、屋根葺きを使うチガヤ、結束材であるツタ植物、床材用のタケなど建築に必要なものはすべてウンガ周辺で入手可能であり、それを伐採したり、集めて運んだりするための働き手も、本番の建築作業と同様に、食事やコーヒーなど飲食物の提供だけで集まってくるものだった。もともと労働の代償として金銭を受け取る賃労働は、ウンガにはまったく馴染みのない概念であった。マラブの家の建築経費を考えたり、費用をルピアというインドネシアの貨幣単位で見積もることはなかった。必要なのは、何人位の働き手が集まり、そのための食事の準備として、どれ位の量の米と、どの程度の大きさの豚が必要になるかという見積もりだけであった。しかし、近年それは大きく変わってきている。県観光局から援助される資金を使ってマラブの家を改築や修理をすることが始まり、ウンガの住民も経費を意識するようになった。もちろん「大きな家」の建築では、日本側の援助資金が建築費用に充てられた。「大きな家」のH氏が会計責任者となり、彼の裁量で資金を配分し建築を進めた。ただし、経費といっても、その多くは建築儀礼で犠牲にされる豚などの家畜や、働き手に食事を提供するための米、コーヒーと砂糖、シリー・ピナンを購入するための費用、およびチガヤとタケなどの材料費であり<sup>9)</sup>、賃金を払うという条件で働き手を集めるというのはきわめて稀なことである。

## 2-2 儀礼的意味

マラブの家には住人がいて、生活の場となるが、儀礼空間であるという点のほうが重要である。そのため、すでに「1『大きな家』の建築」で説明したように、建築の様々な段階で儀礼が執行されることになる。マラブに供物をささげて無事に家屋が建つように祈願するというのが、各工程で執行される建築儀礼の明示的な目的である。それと同時に、儀礼は働き手として集まった村人に食事を提供する機会となる。儀礼で屠られる豚はマラブに対する供物であると同時に、働き手の胃袋を満たす豚肉となるのである。

中核村ウンガにおける「大きな家」の建築を儀礼的側面から検討するために、以下のよう  
な3点に焦点を当てたい。第一に、建築儀礼における4本の支柱、とくに占いの柱の重要性である。占いの柱は、人間の住む地上界とマラブ、さらには一種の至高神である「創る者、

9) その詳細は「第8章 資料編」[小池・佐藤・西山 2011:68-73]を参照。

造る者」(*na mawolu, na malala*) がいる天界をつなぐ役割を果たしていると考えられる。この主柱のもつ宗教性のために、他の木材とは異なった扱いを伐採から木曳き、さらに柱立てに至るまで受けている。とくに木曳きの時に祝祭的雰囲気の中で歌われる儀礼歌はスンバの文化を理解する上で重要である。主柱に使う木を村まで運ぶ時、歌い手が木曳歌を歌い、それに合わせて曳き手が掛け声をかけ力を合わせて木を曳いていく。木曳歌にはいくつか種類があるが、ここでは「豚を運ぶ」(*Wai Honggu*) を取り上げ、スンバの木曳歌の特徴を明らかにしよう。この歌詞のなかで材木は「目が細く柳腰の君 *mareri mata, malowa bangga*」と対句で表現され、美しい女性に譬えられている。「豚を運ぶ」というのは、夫側の親族が妻側の親族から妻となる女性を得て、豚とともに自分の村に連れて帰ることを表している。柱が擬人化される、具体的には「美女」に譬えられるのは、男女の双分的関係と交換が社会の中枢にあるスンバの独自性を表している。

第二に、ウンガの建築儀礼では、祈願の文句が儀礼全体のなかで大きな位置を占めている。マラブを降ろす儀礼を取り上げるとともに、儀礼の段取りを紹介し、さらに祈願の文句の内容を簡単に検討してみよう。

スンバでは祈願者 (*mahamayangu*) が直接マラブに祈りをささげるよりも間接的に祈願する方が良いとされる。大規模な儀礼では祈願者と伝達者 (*maparekungu*) がペアとなって執行する。マラブを降ろす儀礼では、ベンチ (*ladu*) に座った伝達者が「祈願者よ聞きなさい」(*Tengu-da mahamayangu*) と呼びかけながら、儀礼言語を使って、この儀礼の目的を伝える。慣習に従い村人が力を合わせて森に伐採に行き、木材を村に曳いて来たという、これまで経過を語る。伝達者の文句が終ると、続いて祈願者が古い柱に向かって祈りの文句を唱える。祈りは「おお、供物台とカハルにあるシリピナンを噛め」(*Malo! Hapa bili ka na pahapa hape na pahapa la hendu hadanjalu la kahalu*) という文句から始まる。祈願者は伝達者の文句を簡潔に繰り返す。とくに「大地が明るくなり、日が出た時(明朝)、仕事を始める時、冷たい水がもたらされるように」(*ba na wehangu na tana, ba na hunga na hade, ba ku tekku ba ku rama, mata ka ku nyangu ya la wai maringu, ba ku dau ya la wai maringu*) と、翌日の解体作業が順調に進むように祈願する。「冷たい水」、正しくは「冷たい水、肥沃な水」は、安寧と豊穡をもたらすものであり、祈願の文句のなかに必ず登場する言葉である。祈願者の最後の文句は「口で答え舌で応えてくれ、ウンブ<sup>10)</sup>よ」(*Kau hime la ngaru kataki la lama, umbu*) であり、ウンブと呼びかけられているマラブが祈りの文句を受け入れてくれるように願う。用意された鶏と豚が屠られ、その肉は調理され、またご飯の支度が進められる。料理の準備が整うと、祈願者は調理された肉とご飯を前において、マラブに「豚の心臓と肝臓を食べろ！鶏の心臓と肝臓を食べろ！」(*Mala ngangu-nya na puhu wai, ngangu-nya na atu wai. Ngangu-nya na puhu manu, na atu manu.*) という文句で始める祈りを捧げる。その

10) ウンブ (*umbu*) は、男性の個人名の前に付く尊称である。日常よく使用されるし、マラブにも使われる。



後、集まった参加者にご飯と豚肉を煮た料理がふるまわれる。

第三に、ウンガではまだ建築儀礼は形式化してなく、村人が儀礼で祈った結果は、占いの結果に即座に現れてくる。儀礼に参列した長老は、祈りが受入れられたかどうか知るために、犠牲にされた鶏の十二指腸 (*kawanggalu manu*) と豚の肝臓 (*atu wai*) を調べる。十二指腸からは二者択一で吉か凶が分かるが、豚の肝臓からはこの世界の様々な事象を読み取ることができると信じられている。肝臓 (*atu*) は日本でいえば、「心」、すなわち心臓に相当する内臓であり、人間の感情と結びついている。もし占いの結果が凶ならば、別の占いによって凶の理由を探り、そのために、さらに犠牲（普通は成鳥ではなくヒヨコ）を捧げることになる。マラブを戻す建築では、豚の肝臓が良くなく、そのためマラブの許しを乞う儀礼をさらに執行しなければならなかった。このようにウンガでは、人々が住む現実の世界とマラブの世界との間でつねにメッセージのやり取りが行われている。村人は儀礼を通して願いをマラブに伝え、また供犠した家畜の内臓からマラブのメッセージを読み取る。さらに実世界で起きる様々な災いもマラブからのメッセージとして受け取るのである。もし仮に、家屋の建築後、その住人に何か不幸が訪れたら、その災いの原因（災因）が建築中の出来事に帰せられる可能性もある。

### 3 その後の「大きな家」

#### 3-1 中核村ウンガの火災

このようにウンガの村人の労力と日本側の援助によって完成した「大きな家」であったが、2年間もたずに、あっけなく地上から消えることとなった。2010年7月28日13時ごろ、中核村ウンガの「パホーカの家」(Uma Pahoka) で出火した<sup>11)</sup>。当時、この家屋に住んでいた老人とその妻は昼寝中であった。火は人間が生活する空間ではなく、梁で最初に出火したという話しである。囲炉裏で料理もしてなく、昼間なので油を使ったランプも使用していないし、電気も使ってなくて（漏電の可能性もなく）、出火の原因はまったく不明であった。日中なので、何かのガラスがレンズの役割を果たして出火した可能性も考えられる。しかしウンガの住人は超自然的な原因で出火したと考えている。村人は明確に語っていないが、「ラトゥの家」の建築が順調に進んでいないのが、火災の原因であるという災因論がウンガに広まっている。また、火事後、3日目の晩に誰ともしれない女性の泣き声を当時村にいたみんなが聞いたという。

東風が強かったが、火は「パホーカの家」でも、それが燃え移った「河口の家」でも西側の屋根から最初に広がった。火は「パホーカの家」からすぐ隣の「カリトゥ・アフの家」を越えて、「河口の家」と「大きな家」のチガヤ葺きの屋根に燃え移った。さらに「河口の家」

11) この火事の詳細およびその後の対応については、2010年9月27日～30日に筆者がウンガ村を訪問した時に聞いたことに基づいている。なお、スンバ調査は本学特定個人研究費によるインドネシア調査（2010年9月26日～10月7日）の一環である。



写真3 燃え落ちた「大きな家」

から「カリトゥ・アフの家」に火は移ったという。さらに「大きな家」から「トゥラ・パライングの家」（2008年10月に縁側部分を改修した家屋）と「ワイ・モールの家」（Uma Wai Moru）に延焼し、最後は「ルアの家」（2010年11月に改修した家屋）に燃え移った。近くの「ハリ・コンドゥの家」（Uma Hari Kondu）には火が広がらなかった。昼間に出火したが、夜になっても柱は燃え続けていた。結局、この火災で、12棟あった中核村ウングの慣習家屋の内、計7棟が全焼した。

出火当時、村には2人の若者しかいなかった。各家には家の番を務める高齢の住人がいるだけだった。2人は高齢で足が不自由な「パホーカの家」の老人を救うのに懸命だった。この老人はまだ屋根裏にある神器（マムリヤカワダク、先祖伝来の陶磁器など）を救おうと家を出るのを嫌がっていたが、結局救い出された。そのため、かれらは他の家屋にある神器を救い出す時間がまったくなかった。「カリトゥ・アフの家」の屋根裏に保管されていた家宝の陶磁器（植民地時代にスンバに入ったもの）も、屋根が崩れ落ちた時に全て割れてしまった。結局、7棟の家屋と共にすべての神器が燃えてしまった。ただし、屋根裏にあった神器は救い出せなかったが、個人所有のマムリヤカワダクを持ち出した人もいる。「パホーカの家」に保管されていた「ラトゥの家」の家宝である陶磁器も落ち着いていれば持ち出すことができたかもしれないが、みんな慌てていて、すべて割れてしまった。各家屋の住人の多くは、火災当時、中核村の下に位置する畑の家にいた。昼間のため昼寝していた人もいたという。火事に気づいて、多くの村人がすぐに走って中核村に向かったが、そのときは火災はまったく何もできない状態だったという。



写真4 火事に遭った中核村ウंगा

火事後、焼け出された人は他の家屋に入れず、木の下で一晩を過ごすこととなった。スンバの慣習では、火事で「熱く」危険な状態にあるから、かれらは焼けなかった家に入ることが許されないのである。浄化のための儀礼 (*haringu*) を行い、浄化してから、翌日他の家に入った。このように緊急の状況でも、慣習が生きていたという証拠といえる。火事の翌日に最初に出火した「パホーカの家」で鶏1羽の供犠を行い、浄化儀礼を執行した。その後、燃えたすべての家の跡で、ワイ・ハリング（清めの水）を撒いて、火を儀礼的に「消した」。その後、焼け出された人たちは、他の家屋に入ることが許されるようになった。さらに10月に、各家の焼け跡で、1羽の鶏を使って「柱を抜く」という儀礼が実施された。たとえ地上の部分で柱がすべて燃え落ちていても、地面に埋まった部分を抜くことになる。燃えた主柱を抜き、それを村の外に捨てて、火災によって熱く危険な状態になった村を浄化するというのが、この儀礼の目的である。

### 3-2 今後の家屋再建計画

2010年9月29日にウंगाで開かれた話し合いで次のようなことが決った。焼け落ちた家屋のなかから「トゥラ・パライングの家」と「河口の家」、「パホーカの家」、「カリトゥ・アフの家」の4棟を優先して、2011年の10月頃に建てる。その建築資金の一部は県政府観光局から援助が出るのがすでに決っているという。他の3棟は2012年以降に再建する予定となった。「ワイ・モールの家」は「ルンブ・ウーラングの家」(Uma Rumbu Wulangu) があるから（これら二つの氏族は兄弟の関係にある）、「ルアの家」は「ハリ・コンドゥの家」がある

から（これら二つの氏族は兄弟の関係にある）、「大きな家」は「トゥラ・パライングの家」と「河口の家」を建てるという理由で（トゥラ・パライング氏族がこれら3棟の家屋をもっている）、2011年中には再建しないということが決まった。「ラトゥの家」を再建するための儀礼において、上記の4棟は不可欠だということが理由であった。そして、今年集めた木材を使って2012年には「ラトゥの家」を建てるというスケジュールが決った。それが無理ならば、2013年になっても仕方がないが、一度「ラトゥの家」の建築の準備を始めた以上、たとえ火事で7棟もの家屋が全焼しても、それを取りやめることができないという結論であった。

その後、この会議で決まった方向性に向かって、ウンガの村人は動き出した<sup>12)</sup>。「ラトゥの家」の再建のために伐採した後、森林のなかにそのまま残されていた木材を中核村ウンガにまで木曳きする作業が、2010年11月後半に始まった。本来は多くの村人が参加して賑やかに行われるべき木曳きであったが、木材が中核村に到着した時には50人位しか参加してなく、木材を迎える踊りもなかったという。ウンガの村人の考えでは、「ラトゥの家」の建築に向けて一端動き出した以上、作業を放置することは様々な災いを引き起こすことにつながる。すでに述べたように、ウンガにおける火災もその一つとみなされている。とはいえ、11月後半はすでに雨期に入っていて、村人は主作物であるトウモロコシの植え付けに忙しい時期である。そのような状況のために、「ラトゥの家」の主材の木曳きにも関わらず、少数の参加者しかなかったのであろう。

また、執筆の時点（2011年5月）では、まだ焼けた家屋の再建は実現していないが、観光局の予算はすでに降りていて「トゥラ・パライングの家」と「カリトゥ・アフの家」の再建に向けて木材の伐採などの準備は進められている。7棟の焼失という悲劇を乗り越え、ウンガにおいて慣習家屋再建の歩みはすでに始まっている。

## おわりに

本稿の最後に、2007年度から始まった総合研究所・地域社会連携研究プロジェクト「インドネシアとの文化的交流を深めるための総合的研究」の一環として実施してきたスンバの慣習家屋再建プロジェクトの総括を試みたい。これはスンバの慣習家屋再建を援助するという形でインドネシアとの文化的交流を深めるとともに、慣習家屋の建築に関わる知識と技術、また家屋の建築に伴う様々な慣習と儀礼歌などのスンバの地域文化の振興を図り、さらに、儀礼も含めて建築の全工程を映像記録に収めるという目的をもって始まった。

当初は、中核村ウンガで祭祀上の中心となり、もっとも聖性の高い「ラトゥの家」の再建を目指していた。しかし、「ラトゥの家」の儀礼上の格の高さと、それに付随する儀礼上の禁忌のため、「ラトゥの家」の再建は延期せざるをえなくなり、その代替として2008年3月

12) 科学研究費補助金（基盤研究（C））「変動するインドネシアの農村社会における家族・親族の人類学的研究」によって2010年11月2日～12月23日にインドネシア調査を実施した際に得た情報に基づいている。

に「マカテンバの家」、そして10月には「大きな家」の建築を援助することとなった。もちろん、この2棟の家屋の建築は「ラトゥの家」の再建という最終目的を目指す上で不可欠なプロセスであり、当初の計画を断念したわけではない。また、「大きな家」の建築に付随して、国立民族学博物館と竹中大工道具館も参加している当プロジェクトから、「ボーフの家」と「トゥラ・パライングの家」、「ルアの家」の改修費用の一部を援助することとなった。2008年11月の段階で、計5棟の慣習家屋の改修が完了したのである。前回の報告で書いたように、ウंगाはスンバのなかでもとくに貧困に苦しんでいる村であり、日本側からの援助がなかったら、このような建築作業は実現しなかったのであり、その意義は大きいといえる。また、慣習家屋の建築は、特定の人々だけが関わる事業ではなく、中核村全体を巻き込んで進められる出来事であり、その意味で、このプロジェクトがウंगाの活性化に果たした役割は明らかである。

建築工程の記録化という点でも、国立民族博物館の佐藤浩司氏の監修により映像作品2本、短編番組「マラブの家——インドネシア スンバ島」（番組番号 1968, 23分）と長編番組「スンバ島の家を建てる——そしてスンバの人たちにとって家とは何か」（番組番号 7215, 74分）の制作が2010年に完成し、すでに国立民族博物館のビデオテークに収録され入館者に公開されている。また、スンバの建築に関するマルチメディア番組の公開も予定されている。映像記録だけでなく、『竹中大工道具館研究紀要』には、このプロジェクトに関わった3人の連名で報告書〔小池・佐藤・西山 2011〕が掲載されている。映像資料と活字資料の双方の形で、スンバにおける慣習家屋の建築の全容が記録されたことの意義は大きい。筆者自身が携わった部分では、儀礼歌「豚を運ぶ」と祈願の文句が映像資料のなかに取り込まれただけでなく、そのテキストが文字化され日本語に翻訳されたことは<sup>13)</sup>、この家屋再建プロジェクトの成果の一つであると考えている。

以上のようにプロジェクトの成果を挙げることは簡単だが、肝心の「大きな家」が火事に遭い、簡単に焼失してしまったことも、考えるべき大きな問題である。中核村ウंगाでは、軒を接するような形で12棟の家屋が建っていて、1棟で出火すれば、その火が容易に他の家屋に延焼することは十分に想定できたことである。もともとチガヤで葺いた木造家屋であり、非常に燃えやすい木造建築であった。普段の生活では、電気の照明器具もあるが、油のランプも使われていて、火事が起こる可能性は非常に高いといえる。現実には、ウंगाでは何度も火事が起きている。1971年の火事の際は、「マカテンバの家」と「ボーフの家」、「パポーカの家」、「ルンブ・ウーラングの家」、「アナ・リングの家」(Uma Ana Lingu) という5棟が焼失している。この中で「アナ・リングの家」は成員が中核村を捨てたため、家屋は再建されていない。2010年の火事とは反対に、中核村の東側の家屋が火事に遭ったことになる。このような火事の危険性を考慮するならば、たんに家屋の再建を援助するだけでなく、出火し

13) 「スンバ儀礼テキスト翻訳」〔小池・佐藤・西山 2011: 74-85〕では、木曳歌「豚を運ぶ」と3つの儀礼テキストを紹介している。

ないような工夫，さらにたとえ出火しても，それが他の家屋に延焼しないような防止策（消火器の準備など）を村人に提言することも必要だったと現時点では考えている。しかし，村人の考えでは，各家屋の位置は慣習で決まっていて，家屋間の間隔を空けて建築するという提言は考慮されない。ウンガの慣習と現実的な対策の折り合いをどう付けるかというのは，簡単ではない問題である。

最後に，このプロジェクトを通しての問題点を指摘して本稿を閉じたい。援助一般についていえることであるが，援助は依存性を生む結果となりがちである。慣習家屋の建築に関して，筆者は何度もウンガを訪問したが，その度に痛感したのは，以前の訪問以降ほとんど進展がなく，筆者が直接関係者と会って準備を促すことで初めて話が進むのである。援助に慣れることで「待ち」の姿勢になり，その結果，建築に向けて自主的に準備を進めるような姿勢が見られなくなった。前回の報告でも指摘した点だが [小池 2010: 208]，ウンガに指導力を発揮する人間が存在しないため，日本側の援助に頼ろうとする姿勢はますます強くなってしまった。援助というのは単に資金を渡して計画を押し付けるのではなく，本来，最初から援助される側の地域社会に主体性をもたせるような仕組みが必要である。しかし，今回のプロジェクトではそれが十分に達成できなかった。今後，ウンガとの関わりを続ける場合，これは十分に反省すべき点である。

#### 参 照 文 献

小池誠，2010，「スンバで家建てること——インドネシアとの文化的交流を深めるためのプロジェクト報告（1）」『桃山学院大学総合研究所紀要』36-1: 195-211。

小池誠・佐藤浩司・西山マルセロ（共著），2011，「インドネシア，スンバ島の家づくり——ウンガ村慣習家屋再建プロジェクト報告」『竹中大工道具館研究紀要』22: 3-87。

## Building Houses in Sumba: A Report on a Project for Developing Cultural Cooperation between Japan and Indonesia (2).

Makoto KOIKE

The purpose of this paper is to report the activities of the “Rebuilding Ancestral Houses Project” that we have carried out since 2007 in the ancestral village of Wunga (Parai Wunga) on the island of Sumba, Indonesia. The project was formed jointly by Momoyama Gakuin University, the National Museum of Ethnology and Takenaka Carpentry Tools Museum. Subsequent to the first report depicting mainly the rebuilding of Uma Makatamba (the House of Collection), this report aims to describe the process of rebuilding Uma Bakulu (the Big House) and analyze it from a socio-economic and ritualistic viewpoint. Uma Bakulu is the one of the twelve *uma marapu* (ancestral houses) in Parai Wunga. *Uma marapu* means both a physical structure and a social and ceremonial group which conducts corporately ancestral worship for the *marapu* (the apical ancestor of a patrilineal clan).

The original plan of the project was to help the villagers rebuild Uma Ratu (the Priest’s House) which is the most sacred and dignified house in Wunga. However, its sacredness and taboos pertaining to its construction made it difficult to continue the plan we had devised beforehand. Therefore, instead of Uma Ratu, they rebuilt Uma Bakulu and the four ancestral houses in October and November, 2008, which our staff filmed to make a number of ethnographic documentaries. On 23 October, they took down the Uma Bakulu, which had been damaged, and started to rebuild it on the next morning. There were no professional carpenters in Wunga. The villagers worked in a communal way just to obtain food, not wages. It was completed on 6th November when the sacred ornaments identified with the *marapu* were brought back to its attic. At every stage of the construction procedure they conducted a rite to pray to the *marapu* for safe and successful work. We transcribed the words of the prayers and translated them into Japanese. The ritual texts are very important in order to understand the Sumbanese culture and religion.

On the afternoon of 28th July, 2010, Uma Bakulu, the house the project had helped to rebuild, burnt down, together with other ancestral houses in Wunga. As they were made of wood and thatch and close to each other, the fire burnt down the seven houses in a flash. Thereafter, a plan to rebuild them was discussed, anticipating aid from the local government of East Sumba, but none has been completed yet.

Although the project produced audio-visual documents and written reports which help Japanese understand the construction of the vernacular Sumbanese houses and the rites performed

during the process, we consider reflectively the two negative aspects of our aid. First, we should have suggested that the Wunga community take some precautions against the highly probable risk of fire. Second, aid projects often lead the donee side to depend too much on the donor. Actually, the Wunga people would often wait for funding from Japan without any initiative on their part. To avoid such a problem, it is important to encourage initiatives from the donee side before we start an aid project.



## Building Houses in Sumba: A Report on a Project for Developing Cultural Cooperation between Japan and Indonesia (2).

Makoto KOIKE

The purpose of this paper is to report the activities of the “Rebuilding Ancestral Houses Project” that we have carried out since 2007 in the ancestral village of Wunga (Parai Wunga) on the island of Sumba, Indonesia. The project was formed jointly by Momoyama Gakuin University, the National Museum of Ethnology and Takenaka Carpentry Tools Museum. Subsequent to the first report depicting mainly the rebuilding of Uma Makatamba (the House of Collection), this report aims to describe the process of rebuilding Uma Bakulu (the Big House) and analyze it from a socio-economic and ritualistic viewpoint. Uma Bakulu is the one of the twelve *uma marapu* (ancestral houses) in Parai Wunga. *Uma marapu* means both a physical structure and a social and ceremonial group which conducts corporately ancestral worship for the *marapu* (the apical ancestor of a patrilineal clan).

The original plan of the project was to help the villagers rebuild Uma Ratu (the Priest’s House) which is the most sacred and dignified house in Wunga. However, its sacredness and taboos pertaining to its construction made it difficult to continue the plan we had devised beforehand. Therefore, instead of Uma Ratu, they rebuilt Uma Bakulu and the four ancestral houses in October and November, 2008, which our staff filmed to make a number of ethnographic documentaries. On 23 October, they took down the Uma Bakulu, which had been damaged, and started to rebuild it on the next morning. There were no professional carpenters in Wunga. The villagers worked in a communal way just to obtain food, not wages. It was completed on 6th November when the sacred ornaments identified with the *marapu* were brought back to its attic. At every stage of the construction procedure they conducted a rite to pray to the *marapu* for safe and successful work. We transcribed the words of the prayers and translated them into Japanese. The ritual texts are very important in order to understand the Sumbanese culture and religion.

On the afternoon of 28th July, 2010, Uma Bakulu, the house the project had helped to rebuild, burnt down, together with other ancestral houses in Wunga. As they were made of wood and thatch and close to each other, the fire burnt down the seven houses in a flash. Thereafter, a plan to rebuild them was discussed, anticipating aid from the local government of East Sumba, but none has been completed yet.

Although the project produced audio-visual documents and written reports which help Japanese understand the construction of the vernacular Sumbanese houses and the rites performed

during the process, we consider reflectively the two negative aspects of our aid. First, we should have suggested that the Wunga community take some precautions against the highly probable risk of fire. Second, aid projects often lead the donee side to depend too much on the donor. Actually, the Wunga people would often wait for funding from Japan without any initiative on their part. To avoid such a problem, it is important to encourage initiatives from the donee side before we start an aid project.